紅茶のオト

大裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅茶のオト

【Ｎコード】
Ｎ９８２６Ｆ

【作者名】
大裕

【あらすじ】
紅茶を蒸らす時間はもどかしいでしょうか。

一杯目

眠い…

五月、春の良いところだけを集めたような暖かい日だ。

弁当も食べ終わり、満腹の俺は五時間目の授業に備えるため軽く睡眠をとることにした。

夏のようにトゲトゲしない春の日光に柔らかく包まれ、そこに程良く吹き込む校庭の風は温かい。

昼休みの何ともいえないノホホンとした雰囲気

ああ、気持ちなぁ、オイ

枕にしていた左腕が痺れてきた頃

ツンツンと俺の肩を弱々しくつつく誰か

「恭平くん、起きて」

限りなく、か細い声が俺の名前を呼ぶ

「う〜ん　美和子か　なんだ」

まぁ、ほとんど誰だか分かっていたが

音羽美和子

小学五年生の頃に、美和子は俺の通っていた小学校に転校してきた。

なかなかの美人である。

高校生になった今も当時と変わらない肩ぐちまでのばした黒髪

小さく整った顔立ちは、どことなく人形を思わせる。

また、平均身長ぐらいの俺より頭一つ分小さな美和子。

ついたあだ名はビクスドールだった。

とある事情により、俺は家が近いからという理由でしばらく美和子と一緒に登下校を共にしていた。

ほどなく、美和子自身に友達が出来はじめ俺はその役から解任されたわけだが…

何せ美人であった美和子。

つまり一目惚れなわけで、何とか仲良くしようといろいろかんがえをめぐらしたわけで

そんなわけで、今では彼氏彼女の関係にまで漕ぎ着けたわけだ。

その美和子が珍しく俺の教室にやって来た。

普段、俺たちは学校ではあまり話さない。

ベタベタしないというか、それぞれの交友関係を大事にしていると言えば聞こえが良いが、結局二人ともシャイなだけだ。

おかげで、付き合い始めて3ヶ月未だに一緒にデートすら行ったことがない。せいぜいお茶をしに行ったぐらいだ。

「恭平くん、今日部活休みでしょう。おいしい紅茶があるお店を朋子におしえてもらったんだ。一緒に行かない？」

美和子は紅茶が好きだ。

そのおかげで、デートに満たないながらも喫茶店にはよく学校帰りに連れ行かれた。

「そこにね、めったに無いようなレディグレイが置いてあるんだって。恭平くんレディグレイ好きだったよね」

美和子の影響で今や俺も立派な紅茶愛好家。

アールグレイよりも、柑橘系のさっぱりとした風味のあるレディグレイが俺のお気に入りだ。

ちなみに、美和子はアッサムを使ったミルクティーがお気に入りらしい。

「ああ　今日は珍しく顧問が出張とかで来られないらしいから。行こうか。俺も話したい事があるし」

最後の部分は何となく誤魔化すように早口かつ、小さな声で言う。

「良かった〜　じゃあ放課後　校門の所で待っててね。」

あっ、分かる人には分かる程度だが美和子にしては珍しく今のセリフは大きな声だった。

言い終わるなり、トテトテといった風に美和子は教室を後にした。

始業のチャイムが鳴るまであと五分ある。

少しでも、と思いながら俺はまた机に突っ伏した。

ドスドス

また、誰かが俺の睡眠を邪魔する。

今度は美和子じゃない。

俺の肩をドスドスと殴りつけてくる奴は一人しかいない。

奴だ。

顔は机に突っ伏したまま、右手をグルンと行きよいよく振るう。

「グフッ何すんだよお前」

幹斗だ。

「いや　むしろお前が何すんだよ」

まさしく、腐れ縁。

俺と幹斗は家が隣同士、必然的に同じ小中学校を卒業し今日に至る。

いい奴で、俺自身は親友だと思っているが少々うっとうしいのが玉にきず。

今のように変に絡んでくるからせっかく整った顔立ちをしているのに浮いた話は全くない。

「とぼけるなよ　あんなに大きな声で彼女とデートの約束しときながら…喧嘩売ってるのか？」

ああ、そういうことか。ついつい、いつもの癖で大声を出していたらしい。

「つーか　お前の方がうるせーよ」

コイツだって美和子とは小学校からの付き合いだ。事情は知っているくせに…

「あー　彼女欲しい」

「僻みかよ」

いつもの調子で、コントともとれるような会話。

美和子がこのクラスに来ると決まってコイツはそういう。彼女が欲しいと。

なら、その性格を直せっていう話だ。

キーンコーンカーンコーン

廊下から始業を告げるベルの音が聞こえる。

このクラスのスピーカーの音量はオフにでもされているのだろう。

なんだか、遠くから聞こえる。

五時間目は確か生物だったと思う。

だらだらと用意を始めていると、白衣を着た教師が入ってきた。

畜生、あんまり眠れなかった。

二杯目

春の陽気は、午後四時近い今なお続いており学ランの暖かさはむしろ暑苦しささえ感じていた。

授業も終わり下校する生徒。

この学校は進学校ながら、部活動が盛んで同好会も合わせると約５０の部がある。これは、並立する付属の中学校と共に活動している事に由来しどこの部もわりと強豪校であったりする。

残念ながら、我が私立桃丘高校バレー部は県大会止まりな訳だが。

下校する自転車の波の中に待ち人を見つけた。

美和子だ。

「ここだよ」

と、大振りに手を振る。

どうやら美和子も気づいたらしい。

大きく手を振り返してきた。

「お待たせ　恭平くん待った？」

そんな風に、コテッと愛らしく首を傾けられたら待っていても…

「まぁ、そこそこ」

いやはや、小学五年生からの付き合いともなるとそんな初々しいカップルみたいな会話は出来そうにない。

「ゴメンね　掃除当番だったんだ。」

いつもながらか細い声だ。

「まぁいいよ　でもこれでレディグレイが大したこと無かったら…分かっておろうな」

「ははぁ」

何の時代劇だと思えるような恥ずかしい会話をしながら、俺たちは歩き始めた。

「で、どこに有るんだその喫茶店は？」

小柄な美和子に合わせるようにゆっくりとした足取りで歩を進める。

「えっと　朋子はね　末広駅の東口の近くにあるって言っていたんだけど…」

どうやら、詳しい場所までは知らないらしい。不安そうにいつにもまして声が小さい。

ったく、朋子の奴教えるならしっかり教えてやれよ。

いない奴を責めても仕方がない。

「俺は今日時間あるし、美和子も時間あるだろ？　探せばいいさ」

うーん、フォロー出来ただろうか？

「そっかぁ　そうだね」

リンリンリン

その声をかき消さんばかりに、自転車のベルが鳴る。

何というか、良いタイミングだ。

「デートなの？美和子？」

林原朋子

陸上競技界でその名を知らない者はいないとさえ言われる全国的なスプリンターで１００メートルを１１秒台で走り抜ける。

活発な彼女に呼応して、短くそして適度に乱雑に切りそろえられた髪。

褐色の肌。

全体的に、ボーイッシュなイメージを与える。

「ちょうど良かった。朋子昨日言っていた喫茶店ってどこだっけ？」

「ああ、マゼットの事ね。」

声が大きい。

「ほら、駅の近くのハローエッグ知っているでしょ？」

「この前、千佳ちゃんと三人で行ったお店だよね」

「そうそう、そこの斜め向かいに新しくできたのよ」

「うーん　分かったような…」

「本当なら、連れて行ってあげるんだけどね～」

俺の方をちらりと見る。

「邪魔しちゃ悪いじゃない」

こいつも、俺たち同様付属の中学校から進学校から進学した奴なので俺も知っている。
むしろ、幹斗に次ぐほどの腐れ縁だ。

「美和子　ハローエッグなら俺も知ってる　悪いな朋子呼び止めてこれから2グラで練習だろ？　頑張れよ」

「そっ　じゃあ二人共　仲良くしなさいよ」

あれ、今日は練習休みなのだろうか？第二グラウンドとは違う方向に自転車をこいでいく朋子。
心なし、ペダルをこぐスピードは速かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

喫茶店マゼットは、新しくできた割に店内を１９６０年代のアメリカを思わせるような雰囲気を醸し出していた。
壁に掛かっているのは、マイ・フェア・レディや俺たちに明日はな

いといった映画のポスター。

店内に流れているのは、ジャズともとれるような何ともいえない音楽が適当に流されていた。

「なんだか　変な店だね」

全くその通り。

雰囲気の造りすぎだ。

大方、定年退職した珈琲愛好家だかが趣味と想像で作り上げた店なのだろう。あと五年も経てば建物新しさも薄れ１９６０年代のアメリカンテイストに馴染んでくるだろうに…

「何というか　凝りすぎなんじゃないか」

「まっ、問題は味でしょう。頼んでみようよ」

手元を探すが呼び鈴のような物はない。

第一、この店に入ったはいいが誰一人接客に出てくる者はなく2人で勝手にテーブルについたわけだ。

「すいませーん」

大きな声で呼びかけると

「はーい　少々お待ち下さい」

まるで、商社マンがお得意先で自社商品を宣伝するかのようにヌルヌルとした話し口調で返事が返って来た。

ますます、定年退職説が濃厚に成ってきた。

「なぁ　本当に朋子はこの店のレディグレイがおいしいって言ったのか」

大概、美和子と仲良くしていると紅茶に詳しくなる。
朋子も例外でなく、ダージリンのストレートをこよなく愛していた。
俺自身、朋子の舌はそれなりに肥えていると思っている。だから、意気揚々とこの喫茶店までやって来たのだが…

「いらっしゃいませ　ご注文はお決まりですか？」

現れたのは恰幅のよい中年の男性だった。

三杯目

レディグレイといえばトワイニング社のブレンドティーが有名だが、この店のレディグレイは少々趣が違った。

渋みの少ない茶葉をブレンドし、香り付けをしたアールグレイ。

それに、柑橘類を加えたものがトワイニング社のレディグレイだとしたら、この店のレディグレイはある種の深みまでを配合しているようにさえ思えた。

「美味ぃ」

軽く、一口含んだだけで口の中に茶葉の香りとオレンジだろうか柑橘系の爽やかさが広がる。

終始続く爽やかさと香り高い茶葉の濃さは口の中で実に鮮やかな螺旋となり飽きのこない回転を続ける。

最後の一滴、なめとるかのように飲み込んだ雫は口の中を別世界に変貌させる。

この螺旋が仮に終わることなく続けばいくら美味くても必ず飽きる。

しかし、この最後の雫はまさしく螺旋のうねりを止めた。

紅茶は元来渋みを併せもっているものである。

言うなれば、渋みを持ってして紅茶でありうるわけだ。

その渋みが最後の雫に凝縮されていた。

クリアな後味を演出仕切った渋みは、俺がカップを置く頃には綺麗に消えていた。

ここまで演出された紅茶を今まで飲んだことがなかった。

俺はついつい美和子と来ている事を忘れ一言も発しないまま飲み干してしまっていた。

面を上げて美和子を見ると、美和子も目を丸くして紅茶を飲んでいた。

カップにはまだ半分ほど残っている。

「おいしいですね　西野さん」

俺は、隣に立つこの紅茶を運んできた主に声をかけた。

でっぷりと肥えた腹の上に青のエプロンがのっている。

スキンヘッドの頭にどことなく強面の顔。

セールスマンらしい話口調でなかったら本当に暴力団関係の方かと思うだろう。

「それは、有り難うございます」

物静かで、落ち着いた話口調。

「それにしても、レディグレイを置いているなんて珍しくないですか？」

ふいに、疑問を口にする。

「これは、レディグレイであってレディグレイでないんです」

なにやら、哲学的な言葉を綴りだした。

「私の祖母は、イギリス人なのですが日本人留学生だった祖父と結婚して日本に移住して来ました。

祖母はイギリス人にしても珍しいほどに紅茶好きでした。

祖父が定年を迎えるとインドに茶畑を作ると言ったほどですから。

そんな祖母が、オリジナルにブレンドした紅茶がそのレディグレイなのです。」

オリジナルブレンドでここまでとは、俺は本当にここに通いたくなった。

店内の内装も、既に気にならなくなった。

カタン

カップを置く音。

「ああ　幸せ」

美和子が恍惚として空を仰いでいる。よほどこの店が出すミルクティーが気に入ったのだろう。

「気に入って頂けましたか？」

丁寧、だがあまり大きくない西野さんの声。

美和子にはどうやら聞こえていないらしい。

「美和子　おいしかったかってさ」

大きな声で俺が話しかける。

「ひぇっ　あっ　とってもおいしかったです」

本当においしかったのだろう。

声が潤っている。

それに、声も大きい。

「それはなによりです。　もう一杯お召しになりますか？」

二人同時に首を大きく振ったからだろうか。

西野さんは微笑を浮かべながら奥へ空のカップを下げていく。

5月季節は春。

窓だって開いている。

春風も心地よい。

気持ちいい一陣の風は、優しく美和子の髪を撫でた。

俺たちは、窓側のテーブルに着いていた。

そして、西野さんも気づいたのだろう。

あっ、と思っただけの表情。

ただの驚き。

別に、これまでも何人か同じ人を見たはずだ。

実際そうなのだろう。

西野さんはそれ以上気にする事無く、奥へと消えていった。

美和子の耳には、補聴器が入っている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9826f/

紅茶のオト

2010年10月11日20時13分発行